

二日。今朝よりの道すがら、山田の畔におくて刈ほし、且は刈残したるに、霜のおきわたしたる氣色いとをかし。旅人の袖こそことにさむからし霜おきわたる冬のあさ風晚稻かる山田の畔に霜さえて木の葉かつちる里の一むら榊の驛を待るとて、此秋小瀬助信此所にて身まかりしこと、おもひいでし。

さらしなや里の草葉も霜かれて露の形見の色としもなし今夜善光寺の旅宿にて、板屋に木の葉のちるを聞く。

旅寝する軒端の山の下風に木の葉亂れてゆめさめぬめりはかなくも誘ひて果つ軒端なる木の葉は風に夢は落葉にいねがての旅の慣ひを忘れつゝ、小夜の落葉を啣ちてし哉山里のねやの板間に風落て夢もたまらずちる木の葉かな三日。室飯・柏原などいふ山路を行くに、雨いたくしぐれきぬ。

いかばかり袖やしをれむ故郷に歸る山路の時雨ならずは四日。五智の海邊にて。

いつしかとおもひ越路の海原を今日みつ鹽に浦風ぞ吹く居多明神の鳥井の前より、磯つたひに行く。

長路へてはるゝ旅の衣手にいたくなかけそあらいその波長濱と云所にて。

さらでだに日を経し旅は足たゆき越の長濱駒なづむなり名立山をわけ越侍るとて。

露霜にやつれし山の下柴のいづれならまし旅のころも手山川に落葉ながれゆくを見て。

山川の岩うつ波の早ければ風のかけたるしがらみぞなき此山中にいとおもしろき瀧の落侍るを、山人に名を尋ね侍りしかど、しらぬよし申けるも中々をかしくて。

落たぎつ岩うつ水の白浪はいひしらぬ花の名にや立らん山中より海上を望むに、雨雲おほひ、さながら墨をすり流したる様にて、いとすさまじ。

五日。親不知浪間見合せかけ通る也。

聞てだに辛くも有かなたらちねの親不知とは誰か云けん今晩境に至て、皆人安堵の思ひをなすに就ても、凡上野・信濃・越後三州所々の領主、近年所替にて家中の輩、嗟嘆憂苦おしてしるべし。殊に越後の糸魚川は有馬殿、日向國縣政務不宜よしにて、此所へ所替被命。家中の輩遠境を凌ぎて

妻子等移來る有様、不便の事也。よつて思ひつゞけたり。

代々を経て君がしめたる國津風こと里人のさぞ慕ふらん六日。入膳を出て左の方は、高山幾重ともなく重なり、日影のどやかに打けぶり春の心地す。右は海上遙かにみわたされて、浪いと靜なり。西の方に能州の嶋山も見えたり。

わすれては春かと思ふ神無月日影長閑きけふの山の端打けぶり雲かとまよふ越の海の浪間に見ゆる能登の嶋山

左の山の端かさなれるあなたに、雪いとしろうふれるは、たち山なるべしとおぼえて、里人にとへばしかと答ふ。雪はいつふりぬといへば、文月の二十日頃ふりぬとこたふ。麓に立つときたる梢どものくれなゐふかきに、しろくくと高嶺のみえたるさまいとおもしろし。

たち山や染る梢にうつりきて又たぐひなきみねのしら雲八日。石動をいづれば程なく埴生の驛也。紅葉の間に八幡の宮居たち給ひけるをみて。

あふぎ見る朱の玉垣うつろひて今一しほの木々の紅葉ばかりから山をわけ行くに、不動堂あたり紅葉とりわきて見ゆ。

立並ぶ松もうつろふ紅葉ばはいかに時雨し山路なるらん津幡の公館へ立寄公用勤之。それより直に金澤にいたる。

亥の二刻計也。燭を乗て庭際を見る。わら屋の軒いたくかたぶき、庭は落葉ひまなくふりしきたり。

軒端のみあれし宿かはふるさとの庭の梢にあらし吹ころみし春の花も紅葉に色かへておのが宿りをたどる故さと

一、軒の落葉を詠める

十一日。わら屋の軒に木の葉ひまなく散りかゝるを見て。

眞柴屋に誰葺かふと思ふまで軒の板間にちる木の葉かな一、半田惣兵衛の高山在番

十四日。於表御居間・奥村伊豫召之、御馬廻二番組半田惣兵衛、來年三月爲高山在番代可被指遣之條、組中可相觸旨被仰出。但交代日限可爲四月朔日と也。御使番不破覺丞、四五日中高山へ爲御使可被遣旨被命。

一、夜の時雨を聞きて

十七日。今夜はやうより、相しれりける人のとぶらひまかりて、むかしのことなどかたり出侍りけるに、折から時雨ものあはれに聞えけるまゝ。